

フョイエルバッハの会通信 第101号

国際フョイエルバッハ学会ニュース

2016年11月5日付 ライテマイアー会長より幹事宛の幹事会開催通知

「2016年11月12日ミュンスターにて幹事会を開くので招聘する。われわれは17時頃に〔研究大会の〕最後の発表が終わってから集まり、以下の点について協議する。

1. 学会の状態（ライテマイアー）
2. 会計報告（プレーガー）
3. 今年の大会招待への反応（ゾーフアーディング）
4. 出版について（ライテマイアー）

Anfrage des Springer-Verlages (Handbuch Feuerbach)

Finanzierung des Tagungsbandes zur Fachtagung 2016

同年11月10日～13日 学術大会開催

Philosophie und Pädagogik der Zukunft. Die Brüder Ludwig und Friedrich Feuerbach im Dialog

同年12月1日付回状

学術大会発表者宛。本大会の研究成果を出版するので、参加者は5月末までに原稿を送ること。原稿はドイツ語か英語かフランス語で、一人20頁以内。出版は2018年始め。国際フョイエルバッハ研究第7巻として発行する。

書誌情報

川本隆「〈名著再考〉フョイエルバッハ『キリスト教の本質』」 2017年1月『思想』第1113号124-131頁

【参考】

石塚正英『革命職人ヴァイトリング コミュニオンからアソシエーションへ』社会評論社、2016年10月

服部健二『アドルノ的唯物論との対話 石の上悟り切ったと石頭』こぶし書房、2016年10月

会員からのお便り

河上睦子さんより2016年12月23日受信電子メール〔許可を得て転載〕

「『思想』2017/1月号に掲載された川本さんのフョイエルバッハ『キリスト教の本質』の哲学的紹介論、興味深く拝読させていただきました。フョイエルバッハの名が哲学書のなかで見えなくなった昨今の哲学思想状況のなかで「汎神論的理性」からの宗教批判」という川本さん「独自の解釈」をもって、彼の著作の真髄を見事にとまどめてくださり、感謝を申し上げますとともに、感銘を受けました。この川本さんの文を読んで、同時に、フョイエルバッハ研究のなかで新たに議論していかねばならない問題を提起しているようにも思いました。1990年代以降東西冷戦構造が終結し、宗教イデオロギーは崩壊したといわれる状況のなかで、フョイエルバッハ研究も国際学会が生まれ、多様な研究がなされてきました（『フョイエルバッハの会』でその成果をあらわしてきたことは周知のとおりです）。しかし21世紀に入って、かの「9.11」以降、再び宗教イデオロギーの復権、対立が台頭してきています。日本では『日本会議』を始めとして、一部の「神道」の復権にみられる極めて宗教的ナショナリズムやヘイト主義、世界では、イスラム原理主義という宗教イデオロギーおよびテロリズムがあら

わになってきていますが、それをどのように考えていくか見えてきません。こうした思想混迷状況のなかで、フョイエルバッハが『キリスト教の本質』などで展開した宗教批判の意味・思想的役割とはなんなのか。川本氏による〈「汎神論的理性」からの宗教イデオロギー批判の意義〉という解釈を含めて、フョイエルバッハ研究者は、彼の宗教批判の現代的意味を改めて考えていく必要があるように思いました。フョイエルバッハ研究はもう「思想的使命」を終えたのでしょうか？ フョイエルバッハの会も自然消滅や文献紹介でいいのでしょうか？ 自己自身への問いかけと共に、感想まで！」

合評会の企画

昨春、会員の服部健二さんの著書（『四人のカールとフョイエルバッハ』『レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ』）に関する合評会が企画されましたが、大阪唯研と大阪哲学学校共催の「二巻本刊行記念講演会&祝賀会」というスタイルに急変し、当方の意図するような合評会は残念ながら実現できませんでした。出席した方に伺うと、講演会は盛況だったと聞いております。ただし、昨年はその後、服部さんがさらに『アドルノ的唯物論との対話』を出版され、石塚正英さんも『革命職人ヴァイトリング』を出版されるという盛況ぶりです。服部さんの第一書への書評を書いた身としては、この機会にぜひ服部さんの著書 3 冊をメインにした合評会を再企画したいと考えます。目下、私が考えているテーマは「フョイエルバッハの汎神論と唯物論」というもので、服部さんの第一著『四人のカール』の評者として石塚さんにもご協力いただき、川本・石塚がそれぞれの視点からこの著を中心に、コメンテーターとして質問したうえで、参加者全員の質疑・討論を行うというスタイルで行えればと思案しています。

開催場所は、東北方面および関西方面の会員の方々に配慮して、中間地点である東京を第一候補とします。

まだ、企画段階ですので、要領など変更は可能ですが、早ければ今春 3 月に行いたいと思います。企画に賛同され参加を希望される方は、以下の二つの事項をご記入の上、t-kawa@toyo.jp（川本 隆）まで、2月15日（水）までにメール送信してください。

① 3月のご予定（参加できる日・できない日）

② 合評会企画に関するご意見（テーマ・進め方等）

①に関しては、わかる限りで結構です。会は、通常、午後 2 時以降に行います。未定でも、参加意思のある方は、ご一報いただければ幸いです。

文責・川本 隆

XIX.

われわれは魂に移ろう。——われわれが第三考察で見たことは、あらゆる神崇拝が外的自然への人間の依存感情にその歴史的起原があること、自然が個々の現象において人間に与える衝撃的印象が、力と能力で人間に勝る人格態という表象を呼び起こし、それに徐々にあらゆる人間的——人間と量的（大きさと広がり）にのみ異なる——特性を与えたこと、その結果、ほんとうは——真実を見出すにはほぼすべての神学的意見を逆転させさえすれば良い——神が人間をではなく、人間が神を自分の似姿に従って創ったこと、である。

（*ルートヴィヒ・フォイエルバッハ『キリスト教の本質』を見よ。このことは、この著作で哲学的立場から最も根本的なところへと展開されている。）

人間は、自分の肉体的鏡像を楽しむように、自分の似姿である神を楽しむが、人間はそこに自らの全本質を瞥見する。だが、それが自分自身の本質であるとは認識していない。子どもが鏡に映った形をまだ自分の形だと意識していなくても喜ぶのとそれは同じようなものである。

祈祷では、人間は自分たちがごく若い時にすでに刻印されたこの像に自分の信条を打ち明ける。自分が最も秘密にしている心胸の襞をその像の前に広げ、自分のあらゆる気がかりと願望を伝え、自分の魂にのしかかっている良心の呵責を告白する。自分の最も独自で最も内密のもろもろの出来事をこのように隠さず伝えることで、心胸がかなり軽くなったと感じられる。だが、敬虔な祈祷者はこうした心胸の軽減を自己表現の自然の帰結とか恵みとかとは感じず、神の直接的な恩恵として感じる。あるいは、祈祷によって生じる自分への神の直接的個人的作用として、自分への神の個人的愛の証として感じる。したがって、敬虔な人が神の作用のために保持するこうした心胸の軽減は、感謝の感情へ移行し、感謝の感情はさらに愛の普遍的感情へと移行するにちがいない。しかし、愛という自然本性の実質は、その対象が私の魂、私の自我全体に食い込み受け止め貫徹することで、私の感覚のなかで私の自我自身の場に現れ、私の自我はこの対象に完全に埋没し、私はその対象の諸特性を自分自身の特性として感じることになる、という点にある。

じっさいこうして敬虔な人は、礼拝という最も生き生きとした瞬間に自分の神的本質と一つになっていると感じ、人間的人格態の諸制限から解放されて過度に無限に自らを放出する本質として自分を感じる——自分を神と感じるのだ。

この叙述に、神の諸現象や覚醒、悟り、啓示といったいわゆる「内的経験」の起原についての秘密の暴露がある。敬虔な人たちは、理性の抗議に対して、つねにこうした内的経験を、最後の審級のように引き合いに出す。だがこれによって同時に、信心深い敬虔な人の至福の実質がどこにあるかが明らかになる。すなわち、その人が自分の心胸の軽減で初めて神の近さを感じると思い込み、それによって、自分への愛の力に感激し自分の直観に完全に沈潜することで神だけを感じる、言い換えれば、自分自身だけを神として感じる、ということが明らかになる。だが、この至福の感情は数分しか続かない。有頂天はしだいにまた、戻ってくる熟慮に場を譲り、神のうちで我を忘れた敬虔な人と、敬虔な人のうちで我を忘れた神とが、さらに二つの特別な人格に分裂する。敬虔な人は、自分が天から地上に、神的本質から自分の人格的制限のうちにふたたび据え置かれるのを見る。そして彼がかの天に、かの神にまさに初めて身を委ねたことで、それだけいっそう彼自身は非本質的で無趣味でみすばらしいものとして現れ、すべての人間が、婚姻や国家のようなすべての人間的諸関係や諸施設が、それどころか目に見える世界全体が、人間的な愛と友情をわ

れわれに与えうるすべての幸福、芸術と学問をわれわれに与えうるすべての満足が、彼には非本質的で無趣味でみすぼらしいものとして現れる。一言でいえば、彼の目には、すべてのことが、じっさい自分が想像した神との一致が感受されるかの至福以外のすべてが、非本質的で無趣味でみすぼらしいのである。

XX.

キリスト教の神は、人間とのさまざまな関係において慕情と反感を抱く。というのも、神は恩寵によってのみ或る人びとを正しい信仰に目覚めさせ、恩寵によってのみ彼らに永遠の至福を贈るからであり、また、神は非恩寵によってのみ他の人びとを不信心にし、彼らに地獄の永遠の炎を与えるからである。「私はほんとうに神の恩寵で選ばれるのか、それとも神の非恩寵によって放逐されるのか？」この問いは、敬虔な人にとってはたしかに、彼が神の愛によってのみ幸福だと感じる生き生きとした礼拝の瞬間には浮かんで来ないが、当然ながら、それ以外の時に折々湧き起こってくるにちがいない。そしてそのとき、まさに彼が敬虔であればあるほど、神の恩寵と愛が彼の心胸に即してあればあるほど、彼がすでに最も内的な礼拝の瞬間に神的愛の源泉から手に入れたと思い込んでいる至福が大きければそれだけいっそう、こうした問いは彼を苦しめ不安にするのである。これに加えてさらに、敬虔な人が自分の理性の声を完全に黙らせなかった限りにおいて、キリスト教神学がそれ自身の領域で内包している無数の解決しえない矛盾、真にキリスト教的な生活が——そういったものは他のようではありえないが——あらゆる瞬間、感性的自然の拒否できない諸要求や外的な世界の流れに対して生じる矛盾、最後に、神に告げられる極めて熱烈な自分の願いや願望と、それに続く厳しい自らをあざ笑うような現実とのしばしば目を引く矛盾に際して、彼の魂の平安はあまりにしばしば最も敏感な部分にまで乱されるにちがいない。

XXI.

魂の真の平安は、もちろん人間の最も願うに値するものに属するが、それが生じ広がりうるのはただ、君が人間社会に役立つないし役立ったあるいは役立ちたいという意識に対して、また、人間の愛と尊重を求めるその意識に基づく感情に対して、人格的神と関係するあらゆる表象からの根本的な思考と吟味から生じる完全な解放が応じる場合だけである。

とらわれのない思索家にとって、自分の内的平和が関与するたった一つの本質的な関係がある——人間との関係である。というのも、彼にとって存在する唯一の義務は、自分は個人として社会に対して、社会が自分に対するよりもいっそう多く恩恵を受けているがゆえに、自分が人間社会の役に立ち、社会の至福を自分の至福以上に心懸けることである。彼にとって、自分の兄弟姉妹の財産や婚姻、自由、平和の損傷以外の罪は人間のうちに存在せず、一般に人間の至福に関与するすべてのものの損傷以外の罪は存在しない。彼にとって、自分の力や素質や知見を応用する際に弁明すべき主人は一人しかいない。人間社会である。彼が自分の最良の能力でこの主人に奉仕したり奉仕しようとする証言を内的に自分に与えうるとしたら、彼はその他においても自分を自分の生活や生活享受の自由な主人と見なすであろう。

XXII.

親愛なる読者である君がときおり溜息をついて、なぜだかよくわからないことに出逢ったとしたら、私は君にこう言うつもりだ。何かが君に欠けている、私の言葉を信じなさい、と。神学的世界からの何らか曖昧な表象が、そのとき君の中に非本質を押し込み、君の状

態が私の心に向かってくる。というのも、君の魂も極めて細い糸でそうした表象に掛かっている限りで、真の平和が君の内奥に入り込むことはありえないからだ。まさに心から私は願うが、この人間的諸考察が、君の魂からあらゆる不和で不幸な精神を根本的に追放することに寄与するようにと。

XXIII.

人間社会に外的平和がもっと良く打ち立てられるとしたら、それは、キリスト教徒、異教徒、ユダヤ教徒、ルター教徒、カトリック教徒、カルヴァン教徒などの対立が成り立たない場合であり、一般に、人間と人間との関係に超人間的な第三の人格という表象が紛れ込まない場合である。したがって、君の内的平和が最良のかたちで根拠づけられるのも、君があらゆる表象を人格的神から完全に除去してまったく単純にただ人間として人類に君を関わらせる場合に起きる。

君の精神的諸関係のこうした単純化を君は完全に行う権限がある。というのも、この単純化が、人間社会の外的平和と同様に、君の内的平和とうまく合う場合のほかに、それが君に、第一にあらゆる人間的諸関係への洞察を容易にし、第二に人類に対する君の義務遂行を容易にするからである。

諺にこう言われている。長々と質問する人は思い違いも長い、と。人間的諸問題の吟味で、哲学者のように理性の鑑定だけで行うのではなく、キリスト教徒のように神学科で取り入れるように義務づけられていると感じる人は、当然ながら、この吟味にも少なからず関わりをもつ。

第二に、人類に対する義務の行使での緩和に関して言えば、君は、一人の主人にだけ、二人同時よりもより良くかつ容易に仕えることができるだろう。二人の主人に仕えることができる人は誰もいないし、少なくとも、要求や要請が絶えず衝突し合っている二人の主人に仕えることはできない。

XXIV.

真の魂の平和は満足なしには不可能であり、満足はまた、現に存在するもののなかで最も必要かつ重要な生活諸条件に対するわれわれの願望の賢明なる制限なしにはありえない。すなわち、われわれの隣人の注意と愛、宿泊所、十分な食べ物と衣服、婚姻と、わが子を良き人間に、人間社会の有用な構成員になるよう教育するのに必要な手段。いかなる偏見にもとらわれない思索家にとってこれらの生活諸条件は十分整っている。これに対して、キリスト教によって甘やかされ歪められた人間に関して言えば、そういう人はたしかに、自分の隣人への注意と愛を努力もせず放棄することができる。じっさい自分が自分の天上の至福のために隣人を必要とせず、隣人とは非常にゆるい絆でのみ繋がっている。だが、それゆえに彼は自分の内的平和のために、自分の魂の永遠の持続や全能の神の恩寵についての確信を必要とする。彼が永遠の天上の享受が得られるのは、神の恩寵によってのみである。しかし、神の恩寵と自分の永遠の至福に関する確信の完全な感情が彼を歓喜させるのはせいぜい瞬間にすぎない。さらに、神の恩寵や天上の喜びに関する彼の魅力的な表象や像は、神の非恩寵や断固として生じる地獄の刑罰といった、それに伴って生じる他の表象や像によって損なわれるであろうことも少なくない。

心情や空想ほど不安定で動きやすいものはないし、これら両者はキリスト教信仰とその生活の全領域で支配的な力を示している。だが、心情と空想の水銀本質において不思議だと思えないのは、まさに敬虔な人の喜びと享受が世界で最も移ろいやすいものだという点である。敬虔な人の頭と心情ほど速く喜びと苦しみ、天上と地獄が上下前後交互に動くところはない。対象を固定させることができるのは悟性だけであり、心情や空想ではない。

したがって、利得が天上を抱きしめたことはほとんどなく、敬虔な人は、悪魔が自分を地獄の淵にふたたび引きずり込もうと力づくで足を引っ張っている、と感じる。

こうしてわれわれはあるものを確かなこととして仮定することができる。すなわち、キリスト教は、それが真理でありたんに頭だけでなく人格態全体をとらえる力であるところでは、そしてそれが教会の意志に従っているというのであれば、空想と心情の活動をあまりにも刺戟しすぎて、真の平和を与えることができない。

私が真の平和を達成しようと望むならば、私はとりわけ私の無限に動き無制限へと越えて彷徨う心情を礎にしなければならない。すなわち、そうした心情を一定の理性的な目的に固定しなければならない。そうすれば私は、よく言われるように、頭と心臓を右に置き〔健全な考えを持ち〕、自分が何であり何でありたいと思ひ何であるべきかを知る人になる。すなわち、岩の大地に立脚し、互いに流されゆらめく感情やイメージに翻弄されることは決してない人になる。

XXV.

キリスト教を満足させると称される心情欲求は、キリスト教によってことさらに喚起され世話を受けるようなものにすぎず、人類の本質的な欲求ではなく、したがってまた、満足しても見せかけの平和を保証しうるにすぎないような欲求である。

XXVI.

人間は、キリスト教によれば、神の恩寵によってのみ至福となる。すべての良き賜物は上から来る。したがって、人間が至福になりうるための真正な信仰も、自然的人間では彼への神の人格的働きかけによって初めて呼びさまされるにちがいない。神が正しい信仰を君の中に呼びさますという恩寵がなければ、君が正当に創造された人であり社会に有用な成員であるとしても、君の死後は地獄の永遠の炎のなかで焼かれるに値するだけの者である。なぜなら、アダムがリンゴを嚙ったからである。そしてこのリンゴ嚙りによって人間的な自然全体が、神においてもつばら嫌悪感しか呼び起こし得ないほどに毒をもらわれ汚染されたのである。それが、正しい信仰——ただし、前述のように、神の恩寵だけが君にもたらしうる正しい信仰によって、本質的に変形されることがない場合にである。

キリスト教によれば、人間は、神の恩寵によってのみ至福となりうる。したがって、キリスト教は人間から幸福へのあらゆる正当な要求を奪う。ところで、君が人間であるという君の根拠すら否認し、幸福へのあらゆる要求を否認する宗教が、真の平和を君の内奥に付与するのにより相応しいものとなるか、それとも、君の幸福衝動を完全に正当化し人間的な自然自身を、この衝動が真の満足を見出す唯一のエレメントとして説明する将来の信仰すなわち人間の信仰によって相応しいものとなるのか、

XXVII.

敬虔な人は、自分の平和のために自分の魂の永遠の持続を求める。キリスト教信仰は彼に不死を約束するが、哲学はそれを約束しない。だが君が、最善の意志と確信に従えば約束することができないがゆえに敬虔な人に約束しないことがらを、君が彼に送ったかのように彼は君を評価し、それを彼は現金硬貨として受け取る。したがって、敬虔な人の心情はいつの時代でも利己的詐欺師の理想郷だったし、敬虔な人が“神を恐れぬ、哲学に対して持つ嫌悪の念もそこに由来する。

ところで、哲学が、君に不死を約束しえないことを心から残念に思うとしたら、君の人間的で地上的な幸福の最も重要な諸条件を、キリスト教信仰の側から生じるように、彼岸の天上の犠牲に供することも哲学は求めないということもじっさい考えられる。自らの天

上を人間的幸福のうちのみ設定する哲学者にとって神聖なのは、君の人間の幸福の諸条件であり、自分自身の天上をもっぱら彼岸に移さなければならないキリスト教徒は、当然、彼の、それ以上に君の地上の幸福の必要条件に対して無関心であるにちがいない。――だが、哲学者にとってとりわけ神聖なのは君の生命の維持である。君を病人として扱う哲学的な医者は、君から君の生命とともにいっさいを奪うことを恐れるが、キリスト教的な医者は、君の身体的生命とともに君から、君の永遠の魂の、原罪によってひどく汚された服以外の何も取らないと思込む。キリスト教的な医者は君の地上の生活を、君自身が良きキリスト教徒としてできるだけすぐに逃げ出すことを渴望するにちがいない嘆きの谷として、罪の泥沼として考察する。キリスト教的な医者は君の生活を、君にはまったく一度も属さないし、君が君の判断に従って自由に扱うことがまったく許されないことがらとして判断する。というのも、それは、じっさい君の主である神にのみ属し、神が欲すれば君を最も巧みな医者の手もとで死なせることも、神が欲すれば最も邪悪な医者の手から君を救い出すこともできる全能の神に属するからである。

XXVIII.

キリスト教信仰は私に不死を約束するが、だからといってまだ与えてくれない。それと同様、キリスト教信仰は、たしかに瞬間的に死の陰鬱な面を永遠の天上の至福という表象によって何かに覆い隠すことができるが、しかし、そうだからといって、それは私から死を現実に取り去ることはない。私は、哲学者であろうとキリスト者であろうと、死ななければならない。これに加えてさらに、キリスト教宗教は天上の至福の魅力的なスローガンを口実に死のぞっとする面を覆い隠そうとするが、死はかのスローガンによってそれだけいっそう残忍にも君たちに微笑みかけるにちがいない。それゆえじっさい周知のように、キリスト教的芸術家は、彼らの熟練をとくに、死の最も歴然とした最も不快な見物人を叙述して示したのである。

私が死と平和的關係でいたいと思うならば、私を死に対して完全に直接に、あらゆる神学的図像を排除して、立ち向かわせ、あらゆる遠回しの覆いを引き取って、死としっかりと目を逸らさずに向き合うより以上に良い手段はない。少なくとも毎日一回、私は死に対して考察の時間を捧げなければならない。このようにして、死は私にとってしだいに恐るべき幽霊から、喜びも苦しみも私と分かち合い私の生の享樂のために最良の薬味を与える真の友人となり、死は重い苦しみのなかで慰みの最強の香油を私の傷口に滴り落とすことになる。生の享樂において死は私に呼びかける。そうだ、享樂せよ！ 生を享樂せよ。生はうつろいやすいからだ。だが、自然からして短い生命を君が暴力的にさらに縮めない程度に享樂せよ。そして、重い苦しみのなかで死は私に呼びかける。我慢せよ、小を越えて君はじっさい私によってあらゆる苦悩と困窮から救われるのだ、と。

XXIX.

われわれが先の考察で見たように、思考力や意志力は真のキリスト教によって非常に無慈悲に突き返される一方、魂は、これらの力と比べて、自分の寵児であると自慢される。だが、ふつう寵児が大事であるように、魂が大事である。魂は、キリスト教によって甘やかされる。キリスト教が魂の中にできるだけすぐに天上の至福という砂糖菓子への愛好を与え刺戟し、その代わりに、現実生活の粗野ではあるが堅実で健康な栄養価ある食べ物へのいっさいの愛好を下劣とするときには、何が助けとなるだろうか。

XXX.

真のキリスト教は、感性すなわち人間的幸福のこの豊かな源泉とどのように関わるか。

——真のキリスト教は人間の本質を、徹底的に墮落したもの、悪魔が侵入したものとして評価する。だがとくにキリスト教にとっては、われわれの感性的傾向性がわれわれの魂の救いにとって最も危険な悪魔の同盟者とされる。したがって、この同盟は、ありえないことが否定されなければ、可能な限り押し殺されるべきものである。

キリスト教徒は魂の敬虔な享受への権限を持たない。というのも、祈祷が与える享受でさえ、私はただ私の中で作用する真の信仰への神による覚醒を通してのみ、すなわち、神の恩寵によってのみ、関与することができるだけだからである。キリスト教徒は、“不死の、魂の敬虔な享受を、いわんや可死的生命の瀆神の享受などを、正当に感受することは決して許されない。

人間はいかなる正当性も持たないとされる生の享受に関するこうしたキリスト教的考えによって、重く不透明な喪章が一般に人間の生全体へ投げられることを誰が洞察しないというのか。たしかに、それ以上だ。たとえ一つでもこうした考えのなかにあらゆる人間的絆の解消の萌芽があると、誰が洞察しないというのか。あるいは、われわれ人類がわれわれの生の美化のために他の一人を必要とするという洞察、人類の相互的交通を平和的に協調して束ねる最も弱い絆の一つを必要とするという洞察、その交通につねに新たな蘇生を与える最も弱い運動根拠の一つを必要とするという洞察。だが、この洞察は、もしわれわれがキリスト教徒として、同時に、われわれの生を美化するいかなる権利もわれわれに与えられないと信じるべきであるならば、何の助けになるだろうか。そして、国家が正義の秤で分配する賞罰はいったい何を指すのか。報酬は、功績のある市民に生を美化して、他人に自分の真似をするよう鼓舞するために役立つべきではないのか。刑罰は、生の享受の自由における他人の威嚇に対して犯罪者を制限するべきではないのか。だが、国家によって与えられた賞罰は、生の享受にまったく正当性を感じる事が許されないキリスト教徒の目には何の意味があるだろうか。

XXXI.

第 13 番目の考察で見たように、人間の幸福は、あらゆる自分本来の力や素質や衝動が自らを調和的な仕方で展開し実行し当然のように満足させようということに基づいている。その結果必然的に、個々人において精神と魂が感性的生活の犠牲に供されることも、感性や身体生活が精神や魂の犠牲に供されることもあるべきではない。前者が生じるのは、私が過度な感性的享受によって私の悟性力を弱めたり破壊したりし、感性的享受以外のすべての享受に対する私の感情を鈍くするときである。後者が生じるのは、精神的諸力の形成の上位に肉体の形成があるとき、自分の健康に必要な世話がおよそかきとられるときである。いかなる過度の支配的な人間力も、最後は破壊したり弱めたりしつつ、自分自身に逆作用するにちがいない。仮定されたいずれの場合でも、全人類が最後に苦しまなければならない。精神と魂と身体のあるあらゆる力と活動の美的均衡がとりわけ人間幸福の必要条件である。したがって、感性に関して言えば、それはわれわれに二つの条件を提示する。一つは満足であり、もう一つは禁止である。第一条件との関係でわれわれがすでに見たのは、これがキリスト教によって否定され、キリスト教は感性の満足について何も知らずとせず、その主眼はこれを押し殺すことではないことである。したがって、キリスト教が現実的に人間の魂と根本衝動であるところでは必然的に独身生活を送らなければならない。そして、もう一つの幸福条件すなわち感性の制限に関しては、——キリスト教はこうした意図で何を成し遂げるのか。その答え。キリスト教は感性を制限する以上のことをなす。これを押し殺そうとするがゆえにまさに制限とは反対のことをもたらす。Ruimus in vetitum、われわれは喜んで禁止されたものへと自らを陥れる、とラテン語の格言は言う。満足がより厳格かつ無条件的に禁止されればされるほど、君は感性に踏み込み、それだけますます大規模

に感性は刺激する。だが、敬虔な人にとってこの禁止はそれ以上に、彼を永遠に非難することも至福にすることもできる全能の神の凝視そのものとなる。そうした神によって彼は自らあらゆる瞬間監視されていると信じ、神はたんに一般的に自分のうちにある感性的な動きも神的な注目に値する対象として見なすだけでなく、それをすでにそのようなものとして、その満足は別として、彼の尊敬の強奪として、彼の尊厳に対する犯罪と見なす。したがって、まさに敬虔な人においては感性がしばしば、キリスト教に無関心な他の人たちではめったに達しないほどにまで発展するのが見られても、不思議ではない。敬虔な感性が、ケーニヒスベルク人の登場のように逸脱するほど十分なものとなっても、人間自然の知見者にとっては不思議ではない。

XXXII.

われわれはキリスト教を思考力や意志力との関係で、魂と感性との関係で、考察した。思考し囚われのない読者はみな、いまや、この著作の著者ととともに、キリスト教信仰は人間本質の個々の力を一部否定し一部誤り導くこと、したがってキリスト教信仰は、これらの力の調和にけっして満足せず、人間幸福を促進するのに不適切だ、と確信するであろう。

キリスト教は、人間の心のなかで消すことができずに生きている幸福衝動を誤って導く満足の試みであり、一言で言えば、幸福衝動の迷誤である。

このことから帰結することは、キリスト教を無理に解体し、それを責め立て、民衆の嘲笑に委ねるべきだということか。そうではない。こんにちの教養ある人間はキリスト教に対して、成熟した男性が自分の母親に対してもつと同様の関係にある。母親が無知と愚かさから自分の子どもの教育に際してしてしまった多くの不正や過誤が思い出されるとしても、彼は自分の母親を尊敬する。また、たとえ彼が、母親の弱点を説き、彼女の抑制された見解を自分の男性的思考と行動の最上級の法則として通用させることはどうしていないとしても、彼は母親に対して自分の責任にある深い敬意を拒むことはない。

少しも嘲笑しないかあるいはむしろ最も尊敬し大事にするに値するものとしてキリスト教は存在し、真理であると同時に外的諸関係の単純さによって粗野な乱暴に対して守られる。サテュロスの正当な対象であるのはむしろ、無節操に天上の恩寵と世俗の喝采を同時に得ようと競う中途半端なキリスト教徒であり、またとりわけ、キリスト教を有利な仮面として見せつけるかの偽善者である。

いま問題なのは、キリスト教を嘲笑し責め立てることとはまったく別の何かあるものである。人間がまさに、人間の魂と心として同時に呼びうるキリスト教の無意識的な魂すなわち幸福衝動を明晰判明に意識し、幸福衝動を完全に正当なものとして承認することが大切である。

幸福衝動は正当化される。というのも、それは人間の知に根拠づけられているからであり、それは人間の心そのものだからである。人間に、幸福衝動を否定し押し殺すことを要求する人はまさに、心を肉体から引き裂くよう要求する。幸福衝動はその起原からして真実で正当である。というのも、それは人間的なものに由来するからである。だが、それがその目的からして真実で正当であるべきで、人間の幸福を危険にさらす誤った軌道に誤って導くべきではないとしたら、それは非人間的な夢の世界に連れて行かれてはならず、その真の起原と根源に連れ戻されなければならない。したがって、幸福衝動の目的は人間の本質以外の何ものにも設定されない。人間の外に救いはない! この言葉のなかに将来の宗教全体がある。

XXXIII.

先に第 13 考察で明らかにしたように、人間幸福の二つの正当な条件とは、教育と国家

である。

教育は、君が生を賢く享受することを可能にしようとする。すなわち、他の人間が人間的に正当化された理性的で人倫的な生を享受するのを君は妨げず、むしろその反対に、できるだけそれを勧めることで、君が生を享受できるようにする。国家は何を意志するか。他の人間が君の国法的に許された生の享受を妨げず、むしろ君にできるだけそうしようようにしむけることである。教育と国家の目的は、人間のなかにある幸福衝動を普遍的に最善なものと対応し、人間自然の知見と承認に基づく仕方つまり理性的な仕方、それを導き調整すること、である。それとも、理性的国家と理性的教育のこれとは別の目的があれば告げてほしい！

教育と国家は、人間の幸福衝動は正当であるという根本原則に基づく。だがこの衝動は、キリスト教によって、無意識的にはキリスト教の魂であるにもかかわらず、不適切だと説明される。したがって、キリスト教は真の国家と真の教育の原則と矛盾する。

教育と国家に対するキリスト教の矛盾をさらに細密まで明らかにすることは、これまで述べてきたことすべてからして容易である。同様に、思考する読者が教育に関して苦もなく認めるであろうことは、将来人間だけが教育の原理として目に留めておかなければならない、ということである。教育すべき人格は、人間によって、人間を通して、人間のために、つまり、人間における幸福のために、教育され、また幸福衝動はこの目的のために徳に直面して語られ、主として人倫論全体の導きの糸として使われなければならない。それ以外はすべて悪に由来する。青年たる現代!、キリスト教に詰め込まれるのは、青年の力の平和的で調整のとれた形成に敵対する毒素だけである。それは、この著作の著者が挙げる事例から最も明白な仕方、その宗教生活から書き加えられた思い出において認められる。この思い出は、かつて匿名で編集された著者の小著 *Theantropos*, Zürich, 1838 から、より広汎な読者層の注意を向けるためにここでふたたび印刷される。

国家に関してもう一点だけ注意しておきたい。それによってキリスト教と国家のかの矛盾が全範囲で露わになる。

国家は何によってその目的を、すなわち、人間のうちにある幸福衝動を、導き調整するのか。適法性によってである。無法な国家はナンセンスである。法律は、あらゆる国家的諸関係を相互に固く結びつける鉄の紐帯である。だがキリスト教は、世界全体を恩寵と非恩寵からのみ、つまり無法に恣意的に統治する神を崇拜すると称するが、それは何をなすのか。答えはこうだ。キリスト教は法律を称えず恣意を世界の玉座の上に掲げる。それは恣意を神格化する。たしかにキリスト教は、これと矛盾して、神に正義という属性をも分け与えるが、祈りにおいて、最も荘重で最も感動的な信仰行為において、キリスト教徒は神の恩寵にだけ向かうことができるし向かうことが許される。したがって彼はじっさい恣意を自分の神として崇拜するのである。

XXXIV.

人間はますますより明確に、自分たちが人間として、国家公民として、キリスト教徒として、何であり何であるべきかを意識するであろう。人間のかつ国家公民的意識は最も美しい調和のうちにある。それらはじっさい一箇同一の目標に、幸福衝動の充足に突き進む。そして、人間的自然にほかならぬ一つの同一の根拠のうえに立つ。これに対してキリスト教は、人間的ないし哲学的な意識ならびに国家公民的な意識と最も顕著に対立する。それはじっさい一つの根拠も一つの目的もそれらと共有しない。というのも、人間的自然はキリスト教によって呪われるからであり、第二に、キリスト教にとって人間的ならびに国家公民的な意識は不必要であるだけでなく最高に邪魔だからである。したがって、国家とキリスト教との同盟は、哲学との同盟と同様に、自然的ではなく、諸民族や諸政府の平安は、

キリスト教的に統治することではなく 人間認識と 人間愛で統治することにある、ということは太陽の光のように明らかである。というのも、われわれがすでに確信したように、人間本質ならびに人間本質への愛の知見は、人間の幸福の最初の二つの条件だからである。

XXXV.

歴史のほとんどすべての局面も、キリスト教的宗教はけっして平和の宗教ではないことを諸政府に証明している。歴史のどの局面も、諸君が市民社会に持続的な平和を確保したいならば、とりわけ 民衆意識の単純化をもたらしたまえ、と叫んでいる。だが、この単純化は、民衆意識からキリスト教をゆっくりと慎重に離脱させなければ成就できない。

XXXVI.

誰が他者に席を譲るべきか、キリスト教かそれとも人間的意識か、が問題であるならば、後者がすでにその年齢からして有利である。キリスト教の誕生よりもすでに数千年も前に人類は存在し、人間として自らを意識し感じていたのである。

XXXVII.

われわれが歴史から見るように、人類はキリスト教なしに存立しうるし、国家もそれなしに存立しうる。したがってまた、国家は、キリスト教が必要な慎重さをもって次第にふたたびそこから導き出される場合でも、社会的組織の特殊な攪乱を恐れることはない。これに対して、人類を人間意識なしに教育しようと欲することは、ほんとうに野蛮で不合理な企てである。人間意識を否定することが通用するなら、哲学者だけでなく全人類にとどめが刺されるにちがいない。

XXXVIII.

国家はそれ自体教会の生計を心配する義務はない。というのも、国家は国家公民だけを教育し、天上の市民をも教育する必要はないからである。だが、たしかに国家は、時代のあらゆる人倫的すなわち人間的に正当化された要求を、その実現が自分の範囲内にあるならば、考慮する義務を持つ。

軽薄ではなく深く人倫に根差した意味が、現在、キリスト教との闘いにおいてある。というのも、この闘いは必然的に人類の自己意識と連関するからである。それは、ますます多くより普遍的に成長し、大部分は国家自身によって民衆教育と世話によって有効な発明に刺激を与える。

それゆえ、深く人倫に根差した意味を、たとえば、あちこちで知らされた要求は持っている。それはすなわち、キリスト教的教育を自分たちの子どもたちにとって精神的かつ人倫的な関係で有害だと見なす人たちが国家が理性と経験の良き根拠から無理矢理、子どもたちをキリスト教信仰のうちにある公教育に委ねるようにせよというような要求である。

だが、この要求は、たんに深く人倫に根差した意味からだけでなく、国家が人格的利害関心から良き行為をするような仕方からも生じうる。というのは、自由に思考する父親が自分の良心において自分なりに自分の子どもたちへのキリスト教的教育の影響に力のかぎり反対する義務を感じるとしたら、人間社会にとって災いだけがそこから発生しうるからである。だが、そのような場合、民衆の不断に拡大する教養と啓蒙がともに、当然ながら、結果としていつそう頻繁に現れるにちがいない。

XXXIX.

民衆からのキリスト教意識の発生はいくつかの困難と結びつくであろう。それはすでに、

多くの物質的利害関心がそこで脅かされるように見えるからである。とりわけ精神的なものが問題にされ正当化されるように見える。「キリスト教的意識が人間的意識によってますます背後に押しやられるならば、われわれから何が生まれるか。」それには次のように答えることができる。その生存に対するあらゆる危険が消えるのは、善意志を持とうとすることによる、と。神学者から人間学者が、神の奉仕者から人類の奉仕者が、説教師から民衆の教師が、民衆教育に対する戦士から民衆教育と進歩の先駆者が生れる。「教会から何が生まれるか。」その答えは、最も立派なスタイルの民衆教育施設である。だが、この変化はもちろん、キリスト教が民衆意識から離れる程度においてのみ前進することができる。そして、われわれの時代のこの極めて重大な課題において精神的なものが当然ながら最も多く関与しなければならない。それがやがて平和で満足のゆく仕方で解決されるべきであるならば。だが、統一した力がばらばらの力よりもいっそう大きく働く。それゆえ、政治と神学と哲学が、大きな事業を行うために仲良く手を差し出すべきである。政治と神学は、親しく協議して、かの時宜にかなった歩みに必要な手段と方法を理解しようとするべきである。政治は、少なくともキリスト教が消滅しているところでは、キリスト教を異常な手段で支えるべきではない。最後に哲学は、とくに民衆の理解力のための学問を用意してこれに参加すべきである。

神学者たちは現在、教養ある民衆の目から見れば、市民警察を補い支えるべき一種の精神的警察の奉仕者以上のものではない。

前述の変革によって神学者たちに割り当てられるのは、真に聖職者的意味でのずっと価値位置である。神学者の生存を脅かすつもりはまったくないが、ここで伝えられる根本原則が向かうのはただ、人類のつねに速く進む普遍的発展過程をむしろ彼らを分け隔て、それどころかしばしば敵対的でそれゆえ非民衆的な位置から彼らを解放することである。

XL.

現在、ふたたび呼びさまされ一部はふたたび目覚めさせられもするドイツ民衆の統一感情についてさまざまに語られてきた。そのキッカケを与えたのはわが西隣の民衆からの脅威である。この脅威は沈黙させられているがゆえに、危惧されることは、外敵の欠如でこの統一感情がふたたび眠らされるのではないかということである。したがって、もしドイツの君主たちの保護のもとで、前述の教会と聖職者身分の変革がまさに精神的で平和的な仕方で最も良く成就されるにはどうすべきかという重要な問題の解決が真にドイツ的なことがらに、ドイツの問題に、ドイツ民衆のあらゆる精神的諸力の統一点に、高められるとき以上に時宜に適うことはないであろう。

事務局から

* 本紙は季刊発行です（次号3月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>